

## 1 「悲しみが癒えぬ間に」

- 平成 14 年 9 月 21 日 我が家の太陽だった母が、この世を去りました。  
10 月 17 日 二見マックス君が長い闘病生活を精一杯生き抜いて、お星様になる。  
平成 15 年 4 月 8 日 二見メルちゃん治療半ばで天国へ旅立つ。  
4 月下旬 二見飛鳥君が血液のがんと診断され、二見家は三度闘病生活に突入。  
5 月 1 日 高原朋ちゃん急逝。

母が亡くなってから、1 年も経たないうちに身近なところでこれだけのつらい出来事が続きました。悲しみが癒えぬ間に次の悲しみが押し寄せてきて、私たちがいったい何をした罰なのかと、気持ちのぶつけどころがないまま 5 月 3 日、新たに驚かされることおこりました。今度は我が家のハナが悪性腫瘍と診断されたのです。

## 2 「募る不安」

一ヶ月前の 3 月 31 日、ハナの右前足付け根にしこりを発見。翌 4 月 1 日すぐにかかりつけの病院へ連れて行きました。そこでは

「悪いものなら大きくなるはずですから、一ヶ月くらい様子を見ましょう。」

と言われていました。ついでに健康診断も受けておこうと思い、5 月 7 日にはドッグドックの予約も入れていました。その日には何かはっきりした事がわかるだろうと、とりあえず 5 月 7 日が来るのを待っていました。

5 月 1 日、高原さんから知らせを受けた私は、朋ちゃんが急に亡くなったことを伝えるために、木村代表と二見副代表に電話を入れたとき、ハナのしこりのことにも話が及びました。経緯を説明したら木村先生も二見さんも大慌てで私を叱りつけました。

「のんびり様子を見ている場合じゃない！とにかく一日も早く腫瘍の専門医に診てもらいなさい」と。

けれどそのときは、すぐにも別の病院に行くつもりはありませんでした。私としては、すでに予約も入れてあるのだし、いままで長年信頼してかかっていた病院に特別不満は無かったし、他所に診てもらったことをあとでなんと説明すればいいのかと悩むし、とにかく別の獣医師にかかることになにか強い抵抗を感じていました。くどくどと言いつつ私を木村先生も二見さんも、

「変な義理立ては人間の都合であって、そんな事は後でどうにでもなる！今はハナのことを一番に考えるべきだ！」

「犬の寿命は短いのだから、悪いものなら一日でも早く対処しないと即命取りになるよ！」

「ドッグドックで解かることは高が知れているよ？直接そのものを検査してもらわないと意味が無いんだよ」

と異口同音に説得されました。

メルは肺炎がもうすぐ治る、回復に向かっていると言われながらも容態が急変し、亡くなってしまった今となっては根本の死因は不明。飛鳥は指の間にできたできものの切除手術をされた後になって、二見さん自身が異変に気づき、別の病院に診てもらって初めて血液のがんとわかった。朋も前日嘔吐を繰り返し、獣医師に胃か腸の捻転かもしれないが開腹しないとわからないと言われ、開腹手術をされたにもかかわらず原因不明のまま翌日息を引き取ったのだ。二見さんや高原さんのくやしさはどれほどだったろう、そこに思い当たった途端、今度は急にとつもない不安に駆られて、私はようやくわが身の事として、別の病院に行ってみる決意をしたのです。

早速 5 月 3 日、二見さんが飛鳥君の治療に通っている“辻堂犬猫病院”を訪れました。最初は飛鳥の行く日についでに連れて行ってもらおうと思っていましたが、今飛鳥にハナを会わせると体調によくないかもしれないということで、木村先生に道案内をお願いしました。

ドッグドックですのような検査は一通り済ませ、腫瘍自体の細胞を直接採って（細胞診検査）その場で調べてくれました。その後先生から丁寧な説明が始まりました。

「しこりは脂肪腫ですが、このしこりの手前に“肥満細胞腫”があります。こっちのほうが厄介なデキモノですね。悪性腫瘍です。すぐに手術したほうがいいです。浅頸リンパ節と筋肉にも入り込んでいるようなので、最悪の場合は断脚も云々・・・」

獣医さんはおおかた一番最悪の場合のことを言うものだとは、後々分かってきたことですが、このときの私は「断脚」という言葉を聞いた瞬間からそのあと先生がどんな説明をされたのか、正直なところぜんぜん覚えていないのでした。「ハナの前足がなくなったらもうボールで遊ぶことも、一緒に土手を駆け回ることもできなくなる。ハナは後ろの股関節が悪いから、ただでさえ晩年歩けなくなる日がやってくるかもしれないのに・・・でもこのままだと命がなくなる、手術はしなくては！母に続いてハナまでも、なんでこんな目に・・・」頭の中をぐるぐるとそんな思いが巡っていました。

手術は 5 月 12 日ということになりました。それまではとりあえず肥満細胞腫に比較的よく効くというお薬を処方されました。お薬が効けば腫瘍が小さくなって手術もしやすくなるかもしれないとのことでした。手術までの 9 日間、いろんなことを考えては毎日泣いて過ごしました。

### 3 「天と地」

5 月 12 日、ついに手術当日、再び木村先生に付き添ってもらいました。千鶴さんに「あなたがしっかりしないとだめよ！？朝ごはん食べてないでしょ」

と言われ、早朝にもかかわらずお弁当を持たせてもらったら、思わず泣いてしまいました。

午前 9 時 15 分に辻堂犬猫病院に到着。早速手術前の診察が始まると、先生の口から予想もしなかった言葉を耳にしました。

「あれ？腫瘍が消えていますね……。気づきませんでしたか？」

「え？！怖くてあまり触れなかったのでわかりませんでした。どうということですか？」

「この10日間飲んでもらったお薬（抗がん剤）が効いたのでしょう。ハナちゃんのように劇的に腫瘍が消えてしまうケースはたまにあるんです。」

「じゃあ先生、……。手術は？」

「触ってもわからないくらいなので、開いても意味がありません。無罪放免です！」

信じられない急展開にびっくりするやらうれしいやらで、思わず飛び上がるほど喜んでしまいました。人生初めての奇跡です！

往きと帰りでは天と地ほど違う気分で、木村先生と「よかった一本当によかった！」と何度もしつこく同じ言葉を繰り返しながら帰りました。

しかしハナの肥満細胞腫は実は完全に消えたわけではなく、触ってもわからないくらいに小さくなったという状態なので、もうしばらく抗がん剤のお薬は続けることになりました。

#### 4「獣医さんとの出会い」

辻堂犬猫病院には二人の獣医さんがおられます。整形がご専門の樋口先生と腫瘍がご専門の堀先生。飛鳥とハナは堀先生に診察してもらっていますが、堀先生がお休みの日は樋口先生がきちんと対応して下さいます。

ハナが突然嘔吐を繰り返したある日、堀先生がお留守の日であることをすっかり忘れ、慌てて辻堂へ電話したことがありました。樋口先生に症状をお話すると、ハナの診察の経過もすべてご存知の様子で、

「肥満細胞腫からくる嘔吐も可能性としては否定できませんが、先日の様子ではおそらく原因は別のところにあると思います。今日はこの先断食して、もしも吐かなければ明日の朝から食事を……。 (中略) それでも吐くようなら明日の朝を待たずに電話ください……。 」と詳しく対処方法を教えて下さいました。幸いハナはその後嘔吐しなくなり、翌朝はすっかり安心してのんびりしていたら、樋口先生から「今朝までのハナちゃんの様子はどうでしたか？」と安否を確認するお電話を直接いただき、思わず感激してしまいました。こんなにしっかりアフターフォローしてくれる獣医さんがいたのかと。

今までの獣医さんには、尋ねたいことがあっても半分くらいしか訊けなかった、といったどこか敷居の高い感じがありましたが、辻堂の先生方にはとても話しやすさを感じます。こちらが納得できるまでできる限り時間をとって下さるので、よくわからない不安感や心細さが解消されるのです。なにより治療法に対する考え方に好感を覚えます。何を優先させるのか、まず飼い主の気持ちを大切に下さるので、治療法に柔軟性があるのです。もちろん獣医さんと飼い主は人間ですから、そりが合う合わないも関係するかもしれませんが、我が家にとっては、大切なハナを安心して診てもらえる病院に出会えたと思っています。

ただ難点は、東京から辻堂までの結構な距離。緊急を擁するようなけがや病気の場合は時間の壁が生じます。そこで率直に、やはり自宅から近いところにもうひとつかかりつけの獣医さ

んを持っておきたいと相談したら、堀先生も「私もその方がいいと思います」と同意してくださいました。

そこでずいぶん悩みました。“近くて、ある程度設備の整った病院で、しかも患者の評判も良いところ”というのがありそうでなかなか無いのです。同じ板橋に住む役員の矢島さんが相談に乗ってくれました。今までお世話になっていた病院が条件に合っているので、やはり捨てきれずにいましたが、今更顔向けできない、なんと説明したら角が立たないかと悩んでいたら、

「正直に話してみて、対応が変わるようだったら、それから別の病院を探してみれば良いじゃない」

とのアドバイスに背中を押してもらいました。

抗がん剤の飲み薬も終了し、一息ついたところで 7 月下旬、思い切っていままで通っていた病院にとにかく行ってみました。ドッグドックの予約を直前でキャンセルした非礼を詫び、これまでの経緯を説明し、今後も定期的に腫瘍関係は辻堂犬猫病院に診続けてもらうつもりでいること、腫瘍以外の予防接種やフィラリアなど普段の病気相談はこれまでどおりこちらの病院でお世話になるつもりでいることなど勇気を出して正直に話しました。すると

「腫瘍認定医の 1 種ですか。辻堂の先生は優秀な方ですね。ハナちゃんの日常のケアに関してはこれまでと同じようにうちでお世話させていただきますから、そんなに気兼ねすることはありませんよ」

とあっさり言われました。思い切って正直に話してみてよかったと思いました。

## 5 「クラブの意味」

約 6 年前、高原朋ちゃんに偶然出会い、このクラブに紹介してもらいました。いままではイベントに参加することがただ楽しくて、クラブについて特に深く考えたことはありませんでした。しかし“団体”は何のためにあるのか、今回の出来事で初めてクラブの存在意義を実感し、感謝しました。皆さんからの「一人じゃないからね!？」という声がどんなに心強く支えになったか知れません。

各方面から支えてくださったクラブの方々に心からお礼を申し上げます。

木村先生は何度も貴重な時間を割いてハナのために奔走してくださいました。黒江さんには、同じ癌で闘病してきたベリーちゃんの体験をふまえて何度もお電話をいただき、ずいぶん励ましてもらいました。ハナのうわさを耳にした大阪の大西さんからも、やはりロフティ君の体験をもって励ましの電話をいただきました。大西さんはハナの腫瘍が消えたことを報告したとき

「悲しい知らせが続いていたけど、今回のハナちゃんの明るい知らせで、救われたわ。悪い流れが変わった気がする。次は飛鳥君やね！飛鳥君にもきっと良いことが起こると思うわ！」

と一緒に喜んでくれました。

最後に二見さんのことを記しておきます。

二見さんは 8 日にメルを亡くしたばかりでしたが、役員のお仕事を全うするために、そして残

された飛鳥君のためにも悲しみをこらえ、4月20日がんばって今年も油壺の総会に参加されました。飛鳥はいつものように海に入って、お気に入りのボールをくわえてみんなと同じように楽しげに遊んでいました。それからほんの数日後、堀先生の診断で血液のがんとわかりました。正式名は“悪性組織球症”、人間の症例はいくらか報告があるらしいのですが、国内の獣医界では恐らく、ほとんど誰も見たことのない細胞が血液中に発見されたのです。即座に治療法が決まり、急ピッチで抗がん治療に取り組むことになりました。抗がん剤投与の前には輸血が必要で、飛鳥のために二見さんの友人は皆協力を惜みず、飛鳥はなんと、計5回もの輸血と抗がん治療をがんばりました。けれどもがんの勢いは止まらず、5月20日天国に旅立ってしまいました。8歳と8ヶ月でした。飛鳥の闘病中、二見さんは気丈にも飛鳥の前では決して涙を見せず、むしろハナのことのでめそめそしていた私を力強く励ましてくれました。ハナの腫瘍が消えたときは我が事のように喜んでくれました。それなのに私は、飛鳥の最期を知ったとき、わずか半年間に3人の子を次々と見送った二見さんに、かける言葉も見つかりませんでした。二見さんは飛鳥の病气と最期まで闘ってくださった堀先生・樋口先生をはじめスタッフの皆さんに心から感謝していました。できればもっと早くにこの病院に出会いたかったと話しています。また、堀先生は飛鳥を救えなかったと謝られ、血液のがんでも珍しい飛鳥の症例を、できれば学会で報告させてもらえないかと二見さんに申し出られました。第二第三の飛鳥を一頭でも多く救える道を開くために。

辻堂犬猫病院に出会ってから、いまや獣医師の世界も人間と同じように専門分野の道が深まっていることを知りました。注意して調べてみたら、ハナが今まで通っていた病院では、院長先生が主に皮膚病に明るい獣医師であることも知りました。得意分野を持つ医師は診断の角度が違います。同じレントゲンやエコーの画像を見ても、診断力に差が出ます。これからは獣医さんも使い分けの時代がやってくるのだらうと思います。

普段からお世話になっているかかりつけの医者に対して、なんとなく後ろめたい気がして、セカンドオピニオン（第二の所見）を受けることに今ひとつ抵抗を感じている人は、案外私だけではないかもしれません。けれどもこういう考え方が、これからは患者も医者も当たり前になるようになってほしいと願います。心から信頼できる医者と巡り会うのは、住んでいる場所や個人的な事情など、いろんな条件が絡んでなかなか難しいところです。セカンドオピニオンが世間の常識になってくれば、しがらみにとらわれずいろんな病院を訪ね歩くことで、いつか信頼できるお医者さんに巡り会える日が来るのだらうと思います。とは言えなかなかそこまでの時間と労力はかけられないのが実状で、やはり頼れるものは知人です。できるだけ犬友達をたくさん作って多くの情報を集め、効率よく目的に合った医者を見つけられるような環境を作ることが理想でしょう。当クラブの会員の方なら簡単です。年間のクラブ活動を無駄にせず、ぜひとも良い人間関係を築いていってください。

飛鳥とハナは婚約者でした。残念ながらハナは股関節形成不全を持っていて、子孫を残すこ

とはあきらめました。だから二人は“永遠の婚約者”。縁あって飛鳥が辻堂犬猫病院に通うことになって、そのおかげでハナも早期発見で救われました。飛鳥に導いてもらったと思っています。だから飛鳥の分までハナはこれからもがんばります。母の生前、ハナの事はすべて母が管理していました。ハナを残して母が逝ってからこの 8 ヶ月間に、何も分からなかった私が学んだことは少なくありません。この経験が今後、周りの方々にも何かの形で役立てられたら、それが飛鳥への、朋への、そしてこのクラブの皆さんへの恩返しになるのではないかと思います。